



『古今和歌六帖』の本文に関する一考察：出典歌集の配列との関わりから

著者	藤井 翔太
雑誌名	文化情報学
巻	6
号	1
ページ	111-102
発行年	2011-03-10
権利	同志社大学文化情報学会
URL	http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000013118

研究論文

『古今和歌六帖』の本文に関する一考察

―出典歌集の配列との関わりから―

藤井翔太

『古今和歌六帖』の歌に見られる、出典との間の異文が、出典歌集における当該歌の前後に配されている歌に由来すると考えられる用例が存在する。すなわち、『古今和歌六帖』本文は、『万葉集』『古今集』などの一連の歌群を基盤として生成されたと推定される箇所が指摘できるのである。このような用例を検証することで、『古今和歌六帖』本文の成立過程の一面を見出すとともに、平安中期の歌語のあり方を垣間見ることができる。

一

『古今和歌六帖』(以下『古今六帖』と略す) 第六帖「すすき」題の歌群に、次のような歌が載る。

秋ののいでぬとならばはなすすきはかなき空をまねきたててん

(古今六帖・第六帖・三七〇二・伊勢)^①

この歌の出典と目されるのは、『伊勢集』の以下の贈答歌である。

あきののいでぬとならばはなすすきのびにわれをまねきやはせぬ
(伊勢集・四五・秋野花見行くときくをとこ)

いづかたにありときかばか花すすきはかなきそらをまねきたてらん
(伊勢集・四六・かへし)

『伊勢集』四五番と四六番は、ともに「はなすすき」という歌句が第三句に位置する。そして、先の『古今六帖』歌は、『伊勢集』四五番の初句と第二句、そして、『同』四六番の第四句と結句とが、共通する第三句によってつながり合わされたかたちになっているのである。

『伊勢集』の贈答歌は、四季の構成を持つ屏風歌の秋の歌である。四

五番の男の歌に対して、四六番は女の返しの歌であり、これら二首が、腰の句を媒介にして、上句と下句として組み合わせられており、意が通りにくい。この点から考えると、『古今六帖』採歌時の意図的改変とは考えがたい。またこれら二首が贈答歌であることを考慮すると、『伊勢集』内における誤写の可能性は低いだろう。しかし、『古今六帖』諸本においては、当該箇所にて贈答歌を載せているものではなく、前掲の一首しか確認することができない。すると、これはおそらく、『伊勢集』において隣り合わせに並んでいた二首の歌が、現存する『古今六帖』諸本よりも以前の段階では、贈答歌二首が並んで採歌されていたが、その後、共通する第三句「はなすすき」に引かれて、目移りが起こってしまい、一首に統合されてしまった可能性が想定し得るであろう。

また、第三帖「しほがま」題の歌群には、次のような歌が載る。

我がせこを都へやりてしほがまのまがきの島をまつはくるしも

(古今六帖・第三帖・一八〇〇)

みちのくはいづくはあれどしほがまのまがきのしまのつなでかなしも

(古今六帖・第三帖・一八〇二)

これら二首の歌は、配列が前後するが、『古今集』巻第二十東歌を出典とすると見られる。

みちのくはいづくはあれどしほがまの浦こぐ舟のつなでかなしも

(古今集・巻第二十・一〇八八)

わがせこを宮こにやりてしほがまのまがきのしまの松ぞこひしき

(古今集・巻第二十・一〇八九)

ここで目を引くのは、その『古今六帖』一八〇一番と出典の『古今集』一〇八八番との間の大きな異文である。すなわち、第四句に「まがきのしま」と「浦こぐ舟」という異同が存するのである。

『古今六帖』のこの箇所の歌の配列を見ると、一八〇一番の第三句「しほがまの」が共通する歌が、直前の一八〇〇番にも載っている。するとおそらく、この異同も、両歌の第三句が同じであったことに起因するのである。『古今集』一〇八九番の第四句「まがきのしまの」は「松(待つ)」を導いているのであって、『古今六帖』一八〇一番のように「つなで」と結びつくと、意が通じなくなってしまう。

このような異文は、いわゆる本文の乱れとして認識されてきた。宮内庁書陵部蔵桂宮本第一帖奥書にも、

すへてこの六帖いかにやらんいつれもくみなかくのみしとけなきものにて侍れば本のまゝにしるしをく。のちに見ん人心えさせ給へし。

と記されているとおりである。

ただし、それらの異文がすべて、先の例のように、『古今六帖』内部における書写の誤りからくるものと見なされるかといえば、用例のあり方はそれほど単純ではない。すなわち、『古今六帖』の歌を、出典と思しき『万葉集』や『古今集』などの歌本文と比較して異文が認められる場合、その異文が、『古今六帖』の歌の配列に起因するというよりはむしろ、『古今六帖』歌の出典となったであろう歌集における配列に起因

している場合が存するのである。これは、『古今六帖』の本文が生成されるひとつの過程を、如実に物語るものではないか。

本稿では、『万葉集』や『古今集』、『後撰集』他を出典とする『古今六帖』歌、計七首の歌を通して、以下の考察を行う。なお、本文の異同は、複数の伝本を視野に入れて考察する。『古今六帖』諸本は、以下の六本を扱う。

- ・宮内庁書陵部蔵桂宮本
- ・永青文庫蔵北岡文庫本
- ・内閣文庫蔵「和学講談所」印本
- ・内閣文庫蔵「江雲渭樹」印本
- ・ノートルダム清心女子大学図書館蔵黒川本⁽³⁾
- ・寛文九年版本⁽⁴⁾

また、『古今集』諸本については『古今和歌集成立論 資料編』⁽⁵⁾に拠り、『万葉集』は『校本萬葉集』⁽⁶⁾を用いる。

二

『古今六帖』の和歌本文と、出典と目される歌と比較した時に見出される語句レベルの異同が、出典の歌集において前後に配されている歌一首の、歌句の一部に由来していると考えられる三例を示したい。

まず例に挙げるのは、『万葉集』歌を出典とする次の歌である。

みなと風いたくふくらしなごのえにつまよびかはしたづさわぐみゆ

(古今六帖・第三帖・一九六七)

右の歌の出典と目されるのは、次の歌である。

みなとかぜ さむくふくらし なごのえに つまよびかはし たづ
さはになくへ云、たづさわくなり

(万葉集・卷第十七・四〇四二・四〇一八)

『古今六帖』第二句の「いたくふくらし」は、『万葉集』では「佐牟久布久良之(さむくふくらし)」であり、「いたく」と「さむく」の異同がある。また、『古今六帖』結句の「たづさわぐみゆ」は、『万葉集』では「多豆左波爾奈久(たづさはになく)」もしくは「多豆左和久奈里(たづさわくなり)」であり、『万葉集』の本文からは、「みゆ」という動詞は、まずでてこない。

これらの異文は、『万葉集』において、その歌の直前に配されている歌の本文に由来すると思われる。

あゆのかぜ いたくふくらし なごのあまの つりするをぶね

こぎかくるみゆ (万葉集・卷第十七・四〇四一・四〇一七)

第二句「伊多久布久良之(いたくふくらし)」と結句「許芸可久流見由(こぎかくるみゆ)」には、先の『古今六帖』歌の出典との異文が二カ所とも、一首中の同一位置に見出せるのである。

『校本萬葉集』によると、四〇四二番の第二句に異同はない。また、結句は、元暦校本で「たつさわになく」、類聚古集で「たつさはきなく」という異文が認められるが、「みゆ」という語はない。強いて言えば、

「一云」として掲出される「たづさわくなり」という本文が、句末の「なり」を除けば『古今六帖』本文に一致する。

一方、『古今六帖』の第二句は、黒川本・寛文九年版本に「寒く」の異文注記はあるが、「いたくふくらし」で本文は安定している。また結句も、黒川本・寛文九年版本では「たつさはになく」の異文が示されるが、「たつさわくみゆ」で保存されている。黒川本・寛文九年版本に記された異文注記は、『万葉集』本文との校合の結果であろう。

『古今六帖』歌は、鶴のつがいが呼び交わす様子を、結句の「みゆ」と視覚的に捉えているが、鶴が「さわぐ」様子を詠んだ歌であれば、聴覚的に認識されるべきではなからうか。

また、『古今六帖』一九六七番歌の題は「みなと」である。『万葉集』四〇四二番は、「みなとかぜ」が詠み込まれており、題に適っている。だが、その前の四〇四一番歌には、それに類する語は用いられておらず、必ずしも題にそぐわないと思われる。従って、『古今六帖』のこの箇所には、『万葉集』四〇四一番、四〇四二番が並記されていた段階は想定しにくい。とすれば、『古今六帖』歌の異文は、『古今六帖』収載以前に生じた可能性が高い。もちろん、異文発生の場合、出典歌集そのものであったか、あるいは、『古今六帖』の直接の撰歌材料―出典歌集そのものでもあり得る―であったかは、にわかには決しがたい。けれども、当該『古今六帖』歌本文の生成が、出典歌集における歌の配列に根差している点だけは、指摘し得るであろう。

次に挙げる例は、『古今集』歌を出典とする歌である。

いにしへのしづのをだまきいやしきもよきもさかりはありこしもの

を
(古今六帖・第四帖・二二五)

この歌の出典は、次の『古今集』歌である。

いにしへのしづのをだまきいやしきもよきもさかりはありこしものな
り
(古今集・卷第十七・八八八)

『古今六帖』結句の「ありこしものを」は、『古今集』では「有りしものなり」になっている。この異文は、先の『古今集』歌の直後に配されている次の歌、

今こそあれ我も昔はをとこ山さかゆく時も有りこしものを

(古今集・卷第十七・八八九)

の結句に由来するものであろう。

ただし、『古今集』八八八番の結句「有りしものなり」は、『古今集』諸本間でも、わずかながら異文が生じていることが、『古今和歌集成立論』によって認められる。すなわち、元永本は「有にし物を」という本文をもつのである。これもあるいは、直後に位置する八八九番結句に引かれたか。また、基俊本では「ありし物なり」という本文に、「こしものを」という異文書き入れがある。この異文の由来を、『古今集』諸本に求めることは難しい。むしろ、『古今六帖』伝本との校合が想定し得るであろう。

一方、『古今六帖』では、桂宮本は「ありしものを」であり、ひらが

な右傍書によって「ありしものなり」、かたかな左傍書によって「ありこしものを」という、両方の本文を示す。

〔桂宮本〕

また、内閣文庫蔵「江雲渭樹」印本には、「有こしものを」という本文に、「(有)しもの也」の異文が見える。内閣文庫蔵「和学講談所」印本、黒川本、寛文九年版本は、いずれも「ありこしものを」である。つまり、『古今六帖』においては、本行本文を「ありしものなり」とする本はない。とすれば、「(あり)しものなり」という、桂宮本・「江雲渭樹」印本の異文書き入れは、『古今集』本文との校合によるものである可能性が高い。

これらのことから、『古今六帖』二二五一番の歌本文は、『古今集』八八八番・八八九番歌から生成された例と言えよう。当該歌をめぐって、『古今集』と『古今六帖』との間で、本文の校合がなされた可能性がある点にも留意しておきたい。

次の三例目も『古今集』歌を出典とする歌である。

をしむからこひしきものははるがすみたちわかればなに心ちせん

(古今六帖・第四帖・二二三三七)

この歌の出典は、次の『古今集』歌である。

をしむからこひしきものを白雲のたちなむのちはなに心地せむ

(古今集・卷第八・三七二)

『古今六帖』第三句と第四句の「はるがすみたちわかれば」は、『古今集』では「白雲のたちなむのちは」になっている。この異文は、先の『古今集』歌の直前に配されている次の歌の第三句と第四句に由来するものであると考えられる。

かへる山ありとはきけど春霞立別ればこひしかるべし

(古今集・卷第八・三七〇)

『古今和歌集成立論』によると、三七一番の第四句「たちなむのちは」が「たちなんときは」になっている伝本がいくつかあるが、注意すべきは、基俊本において「たちわかれば」という本文になっていることである。これは三七〇番の第四句に引かれたものではないかと推測される。

『古今六帖』の諸本においては、桂宮本・永青文庫本・内閣文庫蔵「和学講談所」印本・同「江雲渭樹」印本において、第二句の「は」に「を」の異文注記があり、さらに第三句の「はるがすみ」に「シラクモノ」の異文注記もある。この異文は『古今六帖』内部には見られない異文であることから、『古今集』との校合の跡であると思われる。

『古今六帖』二二三三七の場合、第四句は、基俊本のかたちでの『古今集』本文を残しているとも言えようが、それ自体も、『古今集』三七〇番歌の影響を否定できないであろう。

次に、『古今六帖』歌と、出典と目される歌の異同が、出典歌集において配列されている前後の歌一首のみならず、出典歌を含む一連の歌群の表現に由来していると考えられる二例を示したい。

まず『万葉集』歌を出典とする次の用例を挙げる。

あめつちもいほつつなはふよろづよにくにさかへんといほつつなは
ふ (古今六帖・第二帖・一二五四・中納言いしかはのとしなり)

当該歌の出典と目される『万葉集』歌は以下の歌である。

あめにはも いほつつなはふ よろづよに くにしらすむと いほ
つつなはふ (万葉集・卷第十九・四二九八・四二七四・
右一首式部卿石川年足朝臣)

『古今六帖』歌と『万葉集』四二九八番を比較すると、初句と第四句に異同が見られる。まず、『校本萬葉集』によると、四二九八番の初句「あめにはも」に『万葉集』諸本の異同は認められない。一方、『古今六帖』の諸本六本内でも初句に異同は見られない。

『古今六帖』の初句に見える「あめつち」という語は、『万葉集』で多数詠まれている。『新編国歌大観』によれば、『万葉集』以後、『古今六帖』まで、今のところ他例は管見に入らない。勅撰集の初出は「あめつちの神ぞしるらん君がため思ふ心のかぎりなければ」(拾遺集・恋一・

六五九・よみ人しらず・題しらず)である。

ところで、『万葉集』四二九八番の前後に配されている歌を見てみると、「あめつち」を詠んだ歌が目立つ。

あめつちに たらはしてりて わがおほきみ しきませばかも た
のしきをさと (万葉集・卷第十九・四二九六・四二七二)

あめつちと あひさかえむと おほみやを つかへまつれば たふ
とくうれしき (万葉集・卷第十九・四二九七・四二七三)

あめつちと ひさしきまでに よろづよに つかへまつらむ くら
きしろきを (万葉集・卷第十九・四二九九・四二七五)

これら三首の初句には、「あめつち」という語が並んでいる。『万葉集』のこれらの歌の存在は、問題の四二九八番の初句の異同とは無関係ではあるまい。『万葉集』における一群の歌を視野に入れる、あるいは、脳裏に浮かべることが可能な状況ではじめて、『古今六帖』歌の異文が生まれたものだろう。

なお、第四句においては、『古今六帖』と『万葉集』、それぞれに諸本間で異同が見られる。『古今六帖』は、桂宮本・永青文庫本・内閣文庫蔵「和学講談所」印本では、表記の差こそあれ、「くにさかへむ」という本文であるのに対し、黒川本と寛文九年版本では「国しられんと」とある。内閣文庫蔵「江雲渭樹」印本は「くにさくむと」になっているが、強いていえば、桂宮本以下の「さかへむ」に近いといえようか。

『万葉集』諸本においても、同様の異同が確認できる。『校本萬葉集』によると、底本の寛永版本をはじめ、多数の本で「クニシラレムト」と詠んでおり、黒川本や寛文九年版本に一致する。元暦校本では「くにさかえむと」と詠んでおり、こちらは桂宮本や永青文庫本、内閣文庫蔵「和学講談所」印本に同じである。古葉略類聚鈔と細井本には、「クニシラセムト」とあり、黒川本・寛文九年版本に近い。さらに古葉略類聚鈔に見える「サカエム」の異文注記は、桂宮本他二本と同じである。

『古今六帖』諸本における桂宮本他の「くにさかへむと」と、黒川本・寛文九年版本の「国しられんと」との対立は、そのまま、『万葉集』の元暦校本や古葉略類聚鈔の異文注記と、寛永版本他の本文との間の異同に重なる。ということは、寛文九年版本系の本文が、『万葉集』の寛永版本など、大多数の本文と一致する点とともに、それと対立する桂宮本以下の本文が、『万葉集』の古写本のひとつである元暦校本の本文と一致することにも、注意を払う必要がある。さて、もう一例は次の『後撰集』歌を出典とする用例である。

からにしきたつたの山のみぢばはくれなゐながらときはなりけり

(古今六帖・第六帖・四〇六四)

当該歌の出典と考えられるのは、以下の『後撰集』歌である。

唐錦たつたの山も今よりはもみぢながらにときはならなん

(後撰集・卷第七・三八五)

ただし、第三句「もみぢばは」や結句の「なりけり」は、次の三八六番歌の歌句が混入したものと、まずは見られよう。

から衣たつたの山のみぢばははた物もなき錦なりけり

(後撰集・卷第七・三八六)

この三八六番歌は、問題の『古今六帖』歌と同じく、『古今六帖』第六帖「紅葉」題に収められているが、四〇七四番に配されており、当該歌から数えて十首後と離れている。とすれば、先に指摘した当該歌の本文異同は、『古今六帖』における配列が隣接していたことよって引き起こされたのではなく、それ以前の『後撰集』の配列形態に起因すると推察される。

だが、この異同が生じる背景として、『後撰集』に収められている、三八五番・三八六番の前後に配されている次のような歌に目配りをする必要がある。

唐衣たつたの山のみぢばは物思ふ人のたもとなりけり

(後撰集・卷第七・三八三)

葦引の山の山もりもる山も紅葉せさする秋はきにけり

(後撰集・卷第七・三八四)

などさらに秋かとはむからにしきたつたの山の紅葉するよを

(後撰集・卷第七・三八九)

当該『古今六帖』歌の第二・三句「たつたの山のみぢばは」は、三八三番と三八六番の第二・三句や、三八九番の第四・結句で、類似した句が詠まれている。このような歌群から、「たつたの山の紅葉」という印象的な句が、よりしっかりと定着していくのであろう。問題の異同が生じた背景には、そもそもこういった歌語のイメージがあることを見落としてはなるまい。

なお、当該歌第四句「くれなゐながら」の発生理由としては、第三句を「もみぢばは」としてしまったために、次の第四句「もみぢながらに」―「紅葉」と漢字表記されていたと推測される―の「紅(葉)」を「くれなゐ」と読んでしまい、最後に音数律を調整した結果が、「くれなゐながら」という句ではないかと推定される。これが、いわゆる誤写であったのか、あるいは、意図的な改変であったのかはにわかに決しがたいが、このような表現の変化が、新たな歌語を生み出すことにもなっていくのであろう。

結句に関しても、三八三番と三八六番で「なりけり」、三八四番で「来にけり」といったように、いわゆる気づきの「けり」が多用されている。「ときはなりけり」という句も、比較的詠まれやすいものである。『古今六帖』四〇六四歌も、その常套表現を用いたものであろう。

四

さて、本稿冒頭で、『伊勢集』の例を挙げ、出典では隣り合わせに配列されていた二首の歌の上句と下句が組み合わされ、『古今六帖』では一首になっている例を挙げた。目移りによるものと見られ、その結果、

『古今六帖』の歌の意は通りにくいものであった。だが、これと同様の誤写の可能性がありながら、組み合わせられた一首が、新たな和歌として成り立っている場合もある。最後に、その例を二首指摘しておきたい。まず『万葉集』歌を出典とする次の歌の用例を挙げる。

秋萩のうへに置きたるしら露のいちしろくしもわがこひめやも

(古今六帖・第一帖・五六五)

この歌の出典と目される歌は、『万葉集』の以下の二首である。

あきはぎのうへにおきたるしらつゆのけかもしまし

こひつあらずは (万葉集・卷第十・二二五八・二二五四)

わがやどのあきはぎのうへにおくつゆのいちしろくしも

あれこひめやも (万葉集・卷第十・二二五九・二二五五)

『万葉集』二二五八番の上句と、『同』二二五九番の下句が組み合わさったものが『古今六帖』歌である。二二五九番第二句「あきはぎのうへに」は『古今六帖』の初句と第二句の一部であり、第三句「おくつゆの」は『古今六帖』の第二句と第三句に共通部分がある。

『古今六帖』の歌は、「秋萩の上に置いた白露がはっきり人目につくように、自分の恋心を表すことなどはない」という歌になり、意は通じる。二首の歌の表現が混じり合ったとしても、違和感はないのである。というより、歌語の本意は、既存の歌句をさらに組み合わせていくことによつ

て、様々な表現のバリエーションを生み出しながら、徐々に固定化されていく。『古今六帖』に見られる、目移りによる和歌本文の誤写と見られる行為も、和歌表現の特質に根差すところと言えよう。

次の『家持集』歌を出典とする『古今六帖』歌にも、同様のことが言えそうである。

雲のうへに雁ぞ鳴くなるうねび山みかきのはらに紅葉すらしも

(古今六帖・第二帖・八四九・たじまのわう女)

この歌の出典と目される歌は、『家持集』の以下の二首である。

くものうへにかりぞなくなるわがやどのあさぢもいまだもみ

ぢあへなくに (家持集・雑歌・二四七)

おほぞらにかりぞなくなるうねび山みかきのはらにもみぢし

ぬとか (家持集・雑歌・二四八)

この『古今六帖』歌は、大部分が『家持集』二四八番歌の表現であるが、初句は『家持集』二四七番に抛り、結句「紅葉すらしも」は、『家持集』のどちらの歌にも出てこない。この句は、『新編国歌大観』を検すると、当該歌を含めて六例ある。そのうち、同時代の例は、「ちる花をとづるかすみははるながらにしの山べもみぢすらしも」(『斎宮女御集』・二五〇)が一例あるのみである。ただ、「……すらしも」という歌句自体は、周知のように『万葉集』に多数詠まれている。また、『家持集』

にも、「あまのがはしらなみたかくわがこふるきみがふなではけふぞすらしも」(家持集・一〇三)、「あまのがはせぜのしらなみさわぐなりわがまつきみぞふなですらしも」(家持集・二一〇)の二例が収められている。

この場合も、『古今六帖』歌は、「雲の上に雁が鳴いているのが聞こえる。その涙で、畝傍山や御垣の原は紅葉しているようだ」という意であろう。雁の涙で紅葉するという和歌の発想の典型は、類想歌を組み合わせながら、さらなる和歌を生み出していくことになる。『古今六帖』は類題和歌集であるから、おのずと似た歌が同一箇所配列される。その状況が、このような目移りを誘発することによって、ある場合には、このような類想歌を生み出す土壌ともなるのである。

五

以上、『古今六帖』と出典との間で本文異同のある歌について、その『古今六帖』の異文が、出典の歌集の当該歌前後の歌、あるいは歌群に頻出する語句に由来する例を考察してきた。従来、このような本文は、単なる乱れとして見過ごされがちであった。しかし、類題和歌集である『古今六帖』本文は、現存する『万葉集』や『古今集』などと同様の、当該歌を含む歌群を基盤として生成された箇所があると考えられるのである。

かつて渋谷虎雄氏は、『古今六帖』所載の万葉歌について、類題に部類された「仮名本の万葉集抄」を利用して採り入れた可能性を示唆された。^⑦ その場合、一首一首の和歌は、もとの歌集の配列から解放される

ことになる。確かに、そのような一面が認められる歌も存するが、その一方で、『万葉集』や『古今集』そのものを、歌の配列も含めて視野に入れることのできる環境において生成されたと思われる『古今六帖』本文もある。もちろん、その環境とは、出典作品のテキスト上に設定し得るものであるが、あるいは、『古今六帖』の編纂者や書写者など、この類題歌集の成立と流布に関わった人々の脳裏に存在したものかもしれない。いずれにしろ、そのような基盤を背景とする本文生成が可能なのは、歌語というものが、個々の本意やイメージをもち、その組み合わせによって和歌が詠まれるからである。それらの和歌の特質は、類題和歌集によって、より増幅されたかたちで現れると言ってもよいのではなからうか。

本稿で採り上げた『古今六帖』歌は、約四千五百首を収める歌集全体からすれば、ごくわずかな数に過ぎない。『古今六帖』所載歌の典故考証に関しても、まだ考察の余地は残っていよう。それらの点については、すべて今後の課題としたい。

註

- 1 以下、とくに断らない限り、和歌の引用は、『新編国歌大観』CD-ROM版Ver. 2.1より。
- 2 本文の引用は、国文学研究資料館所蔵の紙焼き資料に拠る。
- 3 以上の本文は、国文学研究資料館所蔵のマイクロフィルム・紙焼き資料に拠る。
- 4 本文は、福田智子氏架蔵本に拠る。
- 5 久曾神昇氏編、風間書房、昭和三十五年三月（資料編上）・九月

（資料編中）・十二月（資料編下）。

6 佐佐木信綱氏編、岩波書店、第二刷新增補版、一〇十、昭和五十四年五月〜昭和五十五年二月。

7 渋谷虎雄氏「万葉集原歌不明の歌について―歌経標式から古今六帖まで―」（『上代文学』第三十九号、上代文学会、昭和五十二年十一月）。

附記

本稿は、科学研究費補助金基盤研究（C）「文字列データ解析システムの構築と平安中期歌語生成に関する研究」（研究代表者：福田智子、課題番号19500217、平成十九〜二十一年度）、および同基盤研究（C）「文字列データ解析システムの構築と平安朝文学の伝本と表現に関する総合的研究」（研究代表者：同、課題番号22500236、平成二十二〜二十四年度）における研究の一部である。

用例収集に際し、『新編国歌大観』CD-ROM版Ver. 2.1とともに、竹田正幸氏（九州大学大学院システム情報科学研究院）作成の文字列解析器「e-GSA」Ver. 2.00を使用した。